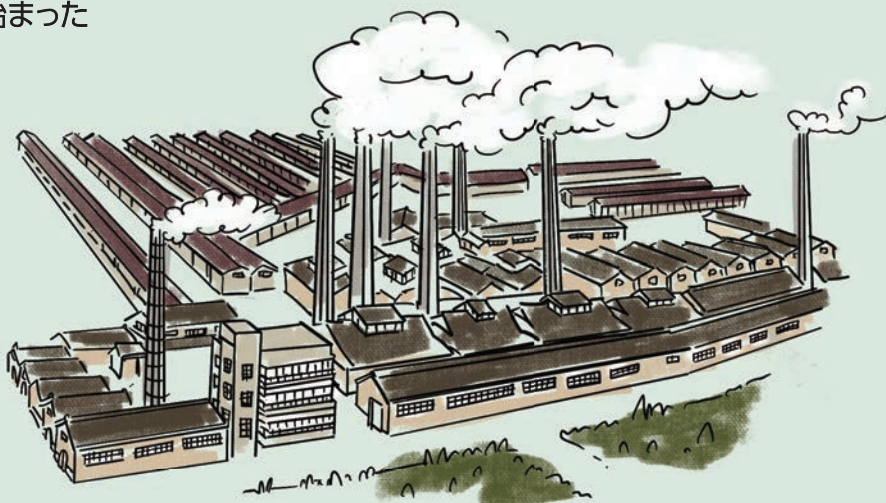


美濃焼のタイル生産は多治見で始まった

明治時代、日本でもタイルが生産されるようになり、当初は「敷瓦」「化粧煉瓦」「貼瓦」など、さまざまに呼ばれていた。日本で「タイル」が統一名称となったのは、大正11(1922)年の平和記念東京博覧会において宣言されたもの。会場では東京タイル業組合が「タイル館」を出展して盛り上がりを見せていた。東濃(東美濃地域)で最初にタイルの製造を始めたのは、多治見の長谷川淳一といわれ、大正3(1914)年に長谷川製陶所(後に日本タイル工業に改組)を設立して以降、市内には次々とタイル製造業者が設立されていった。



タイルのまち・笠原の礎を築いた山内逸三

明治時代から大正時代にかけて、笠原ではタイル生産はほとんど行われておらず、当時は量産の茶碗を製造する陶磁器の産地として活況を呈していた。この町にモザイクタイル産業が興るきっかけを作ったのは山内逸三。彼は15歳で京都市立陶磁器講習所に入所し、タイルの製造技術を学んだ。昭和4(1929)年に帰郷。山内製陶所を設立して製作を始め、昭和10年頃に磁器質の施釉モザイクタイルを開発し、実用量産化に成功した。山内はその技術を地元の事業者を教えて広がり、やがて笠原は国内最大のモザイクタイルの産地となった。

モザイクタイルの聖地・笠原の発展と現在

モザイクタイルは、耐久性・耐水性に優れ、華やかな色合いが映えることから、戦後、風呂場やトイレなどの水まわり、外壁の装飾用に多く使われるようになった。また、輸出も盛んに行われ、笠原のモザイクタイルのシェアは全国一を誇るようになり、昭和40年代には名古屋港における主要な輸出品になった。笠原では、住民の多くがタイル産業に携わり、タイル製造における全工程を分業体制で担っている。一人ひとりの技術と思いが結集し、新たなタイルの可能性を拓く。モザイクタイルの聖地・笠原は、未来へと動き始めている。

モザイクタイルの聖地・美濃焼タイルの現在

タイル工場 約40件
 原料・釉薬会社 約30件
 販売会社 約50件
 加工・その他関連業者 多数

国内総生産量 約1,500万㎡(2020年)
 岐阜県の生産量 約1,050万㎡(2020年)
 締める割合 約70%